

# 2020 年度オンライン・ルワンダ研修報告書

MPJ Youth ルワンダ研修編

## 目次

1. はじめに・謝辞	3
2. 研修の概要	7
3. 会計報告	9
4. 機関訪問報告	11
在ルワンダ日本国大使館、JICA ルワンダ事務所合同ご講演会	11
ルワンダジェンダー家族推進省	13
さくら社	16
Dr. Charles Murigande (チャールズ・ムリガンデ博士) ご講演	18
One Love Project / ルダシングワ真美氏ご講演	20
キガリ高校 Lycée de Kigali (LDC)	22
5. その他の活動報告	24
ルワンダ研修東京観光	24
学生会議	26
6. 参加メンバー紹介	28
7. 終わりに	29

## 1. はじめに・謝辞

この度は、本報告書をお手に取っていただき誠にありがとうございます。この報告書は、2020 年度ルワンダオンライン研修への参加メンバーが半年間に及ぶ研究活動を経て学んだこと、考えたことのすべてを詰め込んだ集大成です。メンバー全員で思いを込めて書き上げましたので、最後まで目を通していただけたなら幸いです。

### MPJ Youth とアフリカ研修について

ミレニアム・プロミス・ジャパン・ユースの会（通称 MPJ ユース）は、アフリカを「学び、発信する」ということをコンセプトに活動している学生団体です。設立から 11 年間、テーマ別の班に分かれての研究活動とその報告会（勉強会）、HP や SNS を通じた情報発信を基本的な活動内容としてきました。また、近年では母団体である SDGs・プロミス・ジャパン（SPJ）のご協力のもと、外部講師をお招きした講演会も積極的に行っています。そんな弊団体の最大の活動こそ、毎年年度末（2018 年度のみ夏季）に行われているアフリカ研修です。「アフリカを五感で感じること」をコンセプトに 2010 年度から始まったこの活動は、今年度（2020 年度）で 11 回目を迎えます。これまでには、ルワンダ（2 回）・ガーナ（3 回）・タンザニア（2 回）・ウガンダ・マラウイ（2 回）を訪問してきました。

### 今回のルワンダ研修について

今回のルワンダ研修は、昨年度までとは打って変わって 2 年度にまたがる 2 部構成となっています。2020 年度 3 月に行われたルワンダオンライン研修は、ちょうどその折り返し地点に当たるイベントです。これは、例年の研修で行われている機関訪問・農村滞在・学生会議の 3 つの柱のうち、機関訪問と学生会議を Zoom 等のオンラインツールを用いて行

ってしまおうという斬新な試みでした。その分、2021 年度 9 月頃に行われる予定の現地研修（※1）では農村等でのホームステイの日程を例年より増やし、各自の個人研究テーマのもとフィールド調査に挑戦するという方向性になっています。

言わずもがな、今回のルワンダ研修がこのような形になったのは新型コロナウイルスの影響によるものです。研修の準備を始めた 2019 年 10 月頃には例年通りの現地渡航を予定していたため、その後何度も予定変更と方針転換を重ねることとなってしまいました。これにより、活動を支えてくださる方々に多大なるご迷惑とご負担をおかけしてしまったことを本当に申し訳なく思います。

一方で、この度のオンライン研修は新しい学びの可能性がぐっと広がった機会でもありました。コロナ禍の影響でオンラインコミュニケーションツールが急速に普及したことにより、日本に居ながらにしてルワンダの生の声をきけるようになったのです。また、訪問予定の人・機関とあらかじめオンラインで交流しておくことで信頼関係が構築され、対面で会った際にはこれまでとは違う深度のお話を聞ける可能性も見えてきました。このように、オンライン研修をアフリカ研修全体のスケジュールに組み込むことでより包括的かつ深い学びが得られるようになったという発見は、来年度以降もぜひ生かしていくべきものだと考えています。

（※1：2021 年 3 月現在においては、2021 年度 9 月の現地研修の実施可否は決定していません。今後の新型コロナウイルスの感染状況を踏まえたうえで、2021 年 5 月頃に判断する予定です。）

## 謝辞

2021 年 3 月 14 日～18 日に行われたこの度のオンライン研修には、もともとの研修メンバー12 名に加え 3 名のルワンダからの留学生（ブルンジ出身 2 人、ウガンダ出身 1 人）が参加し、それぞれが多くの学びとかけがえのない仲間を得ました。しかし先ほども述べた通り、今回のルワンダ研修はコロナ・パンデミックにより幾度もの予定変更・縮小を強い

られてきた不遇の企画でもあります。そのような中でも無事オンライン研修をとり行うことができたのは、ひとえに私たちを支えてくださる方々のおかげです。

まず資金面では、公益財団法人 双日国際交流財団さま、公益財団法人 三菱 UFJ 国際財団さま（※2）に大変貴重なご支援をいただきました。度重なる変更申請にも柔軟に対応していただき、心より感謝しております。

さらに、母団体 SPJ の理事長である鈴木理恵子さま、ならびに職員の方々には私たちの普段の活動から研修準備、実施すべての段階において、多大なるご協力とアドバイスをいただきました。メールの文章の添削から訪問機関・講師の先生のご紹介に至るまで、何かと至らない私たちをフォローしてくださり誠にありがとうございました。これまでお世話になった中で学ばせていただいたことは、これからの活動のなかで積極的に生かしていきたいと思えます。

また、事前研修においては、東京外国語大学現代アフリカ地域研究センター所長の武内進一先生、ルワンダの日本人宿・ボランティアコーディネーターKISEKI の山田美緒さま、ルワンダプロテスタント人文・社会科学大学（PIASS）の佐々木和之先生にご講演会を行っていただきました。ルワンダの第一人者といっても過言ではないお三方のお話はどれも新鮮な学びにあふれていて、日本でルワンダについての学習を継続していくうえでの大きなモチベーションになっています。お忙しい中私たちの活動に快くご協力して下さり、ありがとうございました。なお、特に佐々木先生には現地の社会状況などについての情報を定期的に共有していただいております。これは先行きが不透明な中で研修の計画を立てていく上で非常に大きな助けとなっています。いつも本当にありがとうございます。

加えて、いつも私たちの活動を陰ながら支えてくださっている保護者の方々にも厚くお礼申し上げます。特に今回は時勢上、普段にもましてご心配やご不安がある中、あたたかく見守ってくださりありがとうございました。

そしてなにより、この度のオンライン研修において私たちを温かく受け入れてくださった訪問機関の皆さまに深く感謝いたします。アフリカ研修史上初のオンライン研修が非常に実り多いものとなったのは、間違いなく皆様のおかげです。お忙しいお仕事の合間を縫って丁寧で心惹かれるご講演を行ってくださり、本当にありがとうございました。

最後に、2009 年に弊団体が設立して以来、毎年アフリカ研修の歴史を絶やさずに守ってきてくださった先輩方にお礼申し上げます。先輩方がこれまで素晴らしい実績を積

み上げて来られたからこそ、我々がたくさんの方々にご支援を賜ることができ、この度のオンライン研修をやり遂げることができました。

突然個人的な話になって恐縮ですが、私は自分の調査地が西アフリカのガーナで、しかも事前研修と卒論の執筆期間がかぶってかなり追い詰められており、「わたしはなぜ今ルワンダ研修にこんなにも多くの時間と労力を費やしているのだろう」と呆然としたことも一度や二度ではありませんでした。しかしその度に4年前のガーナ研修に私を連れて行ってくれた先輩たちのことを考え、私は今「してあげている」のではない、昔自分がしてもらったことのほんの一部を後輩たちに「返している」んだと思いなおしていました。お慕いする諸先輩方のような大きく温かい存在に私になれたとはとても思えませんが、その背中を追うことでなんとか後輩たちにバトンをつなぐことができたことを心から嬉しく思います。

私自身は大学卒業をもって活動を引退いたしましたが、ルワンダ研修自体は2021年9月予定の現地研修まで続きます。よって皆様にはまだまだご迷惑とご心配をおかけすることになると思いますが、どうか温かい目で見守っていただきますようよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、改めてこの度のオンライン研修に携わってくださった全ての皆様に心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

(※2：三菱UFJ国際財団さまからの助成金は、計画変更の影響により2021年9月のルワンダ現地研修（仮）で使用させていただく予定です。)

研修代表 東京外国語大学 アフリカ地域専攻4年（研修当時） 井出有紀

## 2. 研修の概要

【日時】 2021 年 3 月 14 日～18 日

【場所】 基本的に各自宅から ZOOM で参加、赤字の対面プログラムのみ東京都新宿区新宿 5 丁目 11-13 博雅ビル 4 F 403 号室（会議室）にて開催

【参加者】 オンライン研修メンバー 計 15 名（2021 年 9 月にルワンダへ渡航する予定の日本人学生 12 名（東京大学、東京外国語大学、東京女子大学）、ルワンダのプロテスタント人文社会科学大学（PIASS）から東京外国語大学へ留学中の学生 3 名（ウガンダ人 1 名、ブルンジ人 2 名））

### 【プログラム（赤字のみ対面プログラム）】

3 月 14 日 16:00-18:00 キックオフミーティング（対面）

20:30-23:30 学生会議 1 日目（ルワンダプロテスタント人文社会科学大学（PIASS）のピースクラブの学生たちと）

15 日 13:00-15:00 三戸優里さま（ルワンダで民芸品輸出関連のコンサルタントご経験者）によるご講演会

17:00-19:00 在ルワンダ日本国大使館様、JICA さまによる合同ご講演会

20:30-22:30 学生会議 2 日目

16 日 9:00-12:00 神戸情報大学院大学さまによるご講演会

16:00-18:30 ルワンダジェンダー家族推進省さまによるご講演会

17 日 8:00-13:00 ルワンダからの留学生との交流プログラム（対面）

15:00-16:30 さくら社さま（教科書制作）によるご講演会

17:00-18:30 ムリガンデ元在日ルワンダ大使によるご講演

## 2020 年度オンライン・ルワンダ研修報告書

20：30－22：30 ワンラブ・プロジェクトさまによるご講演

18日 10：00－16：00 ルワンダからの留学生との交流プログラム（対面）

16：00－18：00 Lycée de Kigali（私立高校）さまとの交流プログラム（対面）

18：00－20：00 しめくくりのミーティング

【内容の概要】ルワンダ関連の機関・企業によるご講演を通じて、ルワンダそして各自の興味分野に関する知識を深める。また、現地の生の声に触れ、各自の研究に活かす。

## 2. 会計報告

支出		収入	
用途	金額（単位：円）	提供元	金額（単位：円）
交通・交流費	101,000	双日助成金	150,000
講演謝礼金	60,000	参加者出費	90,946
会議室使用費	55,017	計	240,946
通信費	20,229		
その他備品	4,700		
計	240,946		

### 詳細

#### 《支出》

・オンライン研修時交通・交流費〔101,000 円〕

・謝礼 さくら社様 10,000 円

神戸情報大学院大学高田教授 5,000 円

三戸優里様 5000 円

One Love Project ルダシングワ真美様 5,000 円

2020 年度オンライン・ルワンダ研修報告書

チャールズ・ルダシングワ博士 5,000 円 同上

KISEKI 山田美緒様 10,000 円

平和活動家/プロテスタント人文社会科学大学 (PIASS) 佐々木和之さん 20,000 円

武内進一博士 10,000 円 ※支払い済み

〔計 70,000 円〕

・会議室代

11/11 第 2 回研修勉強会 20,790 円

12/12 武内先生講演会 7187 円

12/23 クリスマス交流会 4923 円

3/14 オンライン研修 8,778 円

3/18 オンライン研修 13,339 円

〔計 55017 円〕

・通信費 機材購入 (オンライン会議用のマイク、スピーカー、カメラ) 20,229 円

〔計 20,229 円〕

・備品 コード類 4,700 円

〔計 4700 円〕

**支出合計 240,946 円**

《収入》

・双日国際交流財団助成金 150,000 円

・参加者出費 90,946 円

**収入合計 240,946 円**

## 4. 機関訪問報告

### 在ルワンダ日本国大使館・JICA ルワンダ事務所合同ご講演会

この企画は、在ルワンダ日本国大使館さま（以下大使館さま）と JICA ルワンダ事務所さま（以下 JICA さま）のご協力により実現した、この度のオンライン研修唯一の一般公開企画だ。なお、一般参加者を募る後方においては母団体の SPJ ならびに東京外国語大学の現代アフリカ地域研究センターに多大なるご尽力をいただいた。まずはこれらの関係者の方々に心からの感謝を申し上げたい。

プログラムの中では今井雅啓大使と丸尾信所長にご登壇いただき、それぞれの事業概要と協力関係について具体的なプロジェクト例を用いながらご説明していただいた。現職の大使と JICA 所長のお話を一度に聞けるまたとない機会とあって、当日は研修メンバー12名に約 47 名の一般参加者が加わる盛況となった。また、質疑応答の際には様々な年代・属性の方が発言し、活発な議論が交わされた。

冒頭で述べたとおり、今回の講演会は一般公開という立てつけになった。というのも、今井大使は商社出身という異色の経歴を持つ大使であり、ルワンダへの投資を呼び込むために日本社会におけるルワンダの知名度を上げたいという思いをお持ちだったのだ。ご講演の中でも、経済外交に関するお話を伺うことができ大変新鮮であった。内陸国で資源にも乏しいルワンダだからこそ、外国企業による社会実験に積極的に協力したり、自国産品の推進に力を入れたりする傾向が生まれているのだという。その点をふまえた上で日本の強みを生かした経済外交を推進することができれば、日本とルワンダ双方にとってより良い未来を築くことができるのではないかとのことだった。

大使のお話と併せて、丸尾所長の方からも JICA さまの民間連携に関するお話を取り上げていただいた。海外青年協力隊や草の根技術協力事業で知られる JICA さまがソーシャルビジネスの促進も行っているというのは、一般的にはあまり知られていないことなのではないだろうか。ご紹介いただいた中には、この度のルワンダ研修において同じくご講演をお願いしたさくら社さまの事業もあった。いわゆる途上国における初等教育や ICT を用いた教育に興味のある方は、ぜひそちらのページをご参照いただきたい。

質疑応答の時間には、具体的なプロジェクト例に対するものからルワンダにおける最新のコロナ対応、大使のご経歴についてまでさまざまな質問が寄せられた。学生風情がこのようなことを申し上げるのは失礼かもしれないが、どんな質問に対しても具体的なデータとユーモアを交えながらわかりやすくご回答されるお二方のご様子からは職務に対する誠実さが伺え、とても素敵だなと感じた。（井出）

## ルワンダジェンダー家族推進省

本稿は、今年の 3 月 16 日にオンラインで行われた、ルワンダのジェンダー家族推進省 (Ministry for Gender, and Family Promotion 通称 MIGEPROF) の役員の数名をお招きしての、同機関へのオンライン機関訪問について記録をとったものである。なお、英語で話された部分でも日本語に意識して記録している箇所がある。

はじめに、同機関について軽く紹介する。MIGEPROF は、ジェンダーを担当する「MIGEPROF は、ジェンダーを担当する省として、ジェンダー平等化の推進、ジェンダー主流化及び女性の国家社会経済開発への参加を促進するための具体的な取組みを行う」(2012.JICA)。調査機関などの他機関との協力のもとに、2003 年の憲法にジェンダー平等を明記したことを受け、全ての場面における女性差別の撤廃を通して、ジェンダー平等を横断的目標として目指している。実際にルワンダは 2003 年以降、議席割当制などの工夫の結果国会議員全体に占める女性の比率が世界で最も高い(6 割超)国として注目を集めている。

ここからは、公演の様子を記録していく。

### 1. Ntagozera 氏の話

氏によれば、ルワンダが国家全体でジェンダー平等を目指すのは、男女関わらず中心職でも協力することによってのみ、ジェノサイドからの真の復興はなされるという考えがあるからだという。その結果、議員でも、男女問わず high level of leadership を担うことを意識して議員率の調整が目指されている。

国の取り組みは多くが成功し、国際社会からの評判もいい。しかし、まだ残る課題についても今回は話してもらった。まず、まだ女性の社会進出に関する否定的考えが残っている層もあるので、彼らに対する対応が必要だ。次に、女性・女子の極度の貧困がルワンダでは問題となっており、公的機関が職を彼女達(特に女性 女子にはより良い教育を与えることが求められる)に与えることで貧困からの脱却を手助けしようとしている。3つ目に、中央政府での女性の社会進出が脚光を浴びる一方、地方政府や民間での活躍は不十分だといえる。中央部から意識変革の波を広げていく方法を模索中である。最後に、COVID-19 感染拡大によって、女性活躍の場が次第に削られているという。Quick-win プロジェクトを実施し、この動きを阻止することに急を要している。

## 2. Asimwe 氏の話

COVID-19 の感染拡大による影響は、女性活躍の場が失われるだけではないという。感染拡大を受けた外出自粛要請が日本よりも強制力をもつルワンダだが、自由な外出が制限されている中で甚大な被害を受けているのが農業部門である。地方に住む女性の中には農業に生計を依存している人も多く、農業が奮わないことで生活の基盤が揺らいでいるケースもある。

また、この「職業におけるジェンダーバイアス」については、未だに根強いものの、軍隊に入る女性が現れるなど、教育の普及によって徐々にその存在を消していつている。

## 3. Munyemana 氏の話

氏は、National Child Development Agency の一員として、子どもの権利向上に向けた取り組みについて公演して下さった。

児童労働・子どもの貧困・女兒教育の不足・ジェノサイド後の家族への心及び生活面でのケアなど、子供に関する課題は経済発展の著しいルワンダにも多く残されている。

そこで公的機関では、親を失った若者・児童にもルワンダ国籍を認めたり、奉仕活動で家族としての意識や繋がりを強めてもらうといった取り組みをしている。また、伝統的家族システム(地域の中での、血縁を超えた「大きな家族」による育児がルワンダでは長く行われてきた)が変化していることを受け、里親システムの整備も進めている。

## 4. 質疑応答

印象的であったのが、日本の児童・ジェンダー問題との比較による質問・議論が多く出されたことだ。ちょうど日本オリンピック協会で女性蔑視的な発言が当時の会長によってなされたタイミングであったことを受け、日本でも個人間で大きな「gap in awareness(意識の差)」があるというコメントを講演者から受けた。ルワンダのような議席割当制を日本が本格的に国会などで取り入れるかどうかの議論はまだ注目を集めきれていないものの、今後の様子に注意が必要だ。また、児童問題については、6分の1の児童が貧困状態にある一方、高等教育を受けて高い収入を得られる仕事に就ける子どもがいることについて、義務教育が徹底されているものの、その質には大きな格差があることにも視点が向けられた。先進国

だからといって、見逃している問題がないわけではないのだということを再認識させられた議論であった。（田口）

## さくら社様

### ①さくら社の活動内容

さくら社は教育関係の書籍やソフトを作成、販売している東京都の企業である。日本国内に向けて販売している商品としては、授業づくりや学級づくりに関する、教員に向けた書籍の出版を中心に、小学生を対象にした算数や外国語活動用のソフトも取り扱っている。さらに、2018年から、JICAの中小企業・SDGs支援事業の枠組みを活用し、ルワンダにおいてさくら社の算数ソフトを小学校に導入するための普及・実証事業も行っている。

### ②講演内容

講演では、主にルワンダの教育現場の課題や、さくら社の算数ソフトを取り入れたことでのような変化が起こったかについてお話を頂いた。

今回現地での課題として言及されていたのは、パソコン等の機材を有効活用できていないことであった。ルワンダがIT立国を目指していることや、人手不足を補うといった理由から、さくら社が事業を展開する以前から既にクラスにはパソコンが給付されていた。しかし、それが活用されないまま放置されていたため、そのパソコン、そして現地の教科書に合わせたソフトを開発し、授業を開始した。

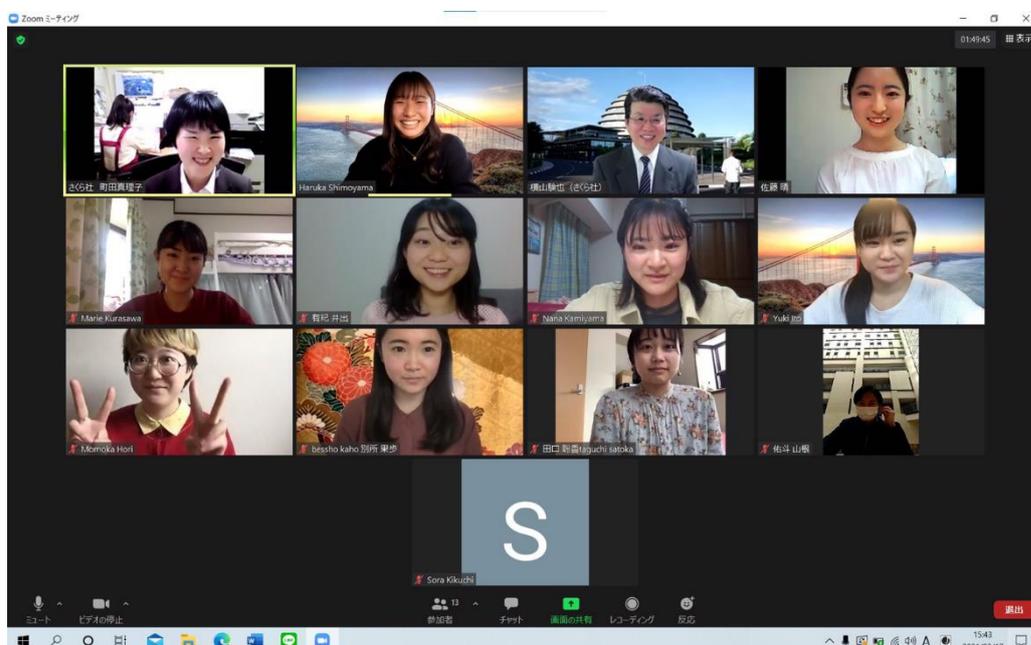
この算数ソフトの導入によって、生徒と教員の両方にポジティブな変化が起こった。生徒にとっては、テストの点数が飛躍的に向上した。導入以前は計算する際に手や紙に実際に印(○や・など)を書いて、それを数えることで解答を導き出していた。それが、導入後には数のまとまりを意識して頭の中で計算することが可能になったのである。また、大きな変化として、点数だけでなく、ゲーム感覚で学べるというソフトの特徴によって、算数の勉強に対して「楽しい」という肯定的な感情を抱くようになったという点も挙げられる。

教員においても、生徒との双方向的な授業が展開されるようになった。さくら社の算数ソフトを導入する前は、教員が生徒へ一方的に学習する内容を教える、生徒の主体性に欠けた授業であった。ところが、実際に教員に向けてこのソフトを使用した研修を実施したところ、前述したようなゲーム感覚の面白さに刺激され、生徒と質疑応答などのコミュニケーションをとりながら授業を行う様子が見られた。

### ③講演を通して

それまで学習習慣や数学的な考え方が身に付いていない生徒の点数を上げることは簡単ではないと思うが、それ以上に、勉強することを楽しいと思わせる、数学に対する苦手意識を克服するといった内面的な変革を起こすことは難しいように思う。政府や多国籍企業のような大規模なアクターではなく、日本の中小企業が国境を越えてそのような課題に取り組んでいるということに、非常に感銘を受けた。使用している算数ソフトについても、プログラミング等の知識のない私たちにもわかるように説明してくださり、目から鱗の指導法が多くあった。

そして、抽象的な話になってしまうが、何よりも印象的であったのは、さくら社の社長である横山様、今回対応してくださった町田様の教育に対する熱意である。私自身、教育に携わりたいと考えているものの、勉強すればするほど、現場を踏めば踏むほど、自分の無力感を感じるが多かった。しかし、今回お二方のお話を聞き、壁を崩すには、まず目の前の子どもに真摯に向き合うことから始まるのだと、背中を押された思いでいる。いつかまたお会いすることがあれば、胸を張って教育について語り合えるように、これからも精進していきたい。（佐藤）



ご講演の様子。上段右から2人目が、横山社長。同じく左からお一人目が、町田様。

2020 年度オンライン・ルワンダ研修報告書

さくら社公式ホームページ：home | さくら社 (sakura-sha.jp)

## Dr. Charles Murigande (チャールズ・ムリガンデ博士) ご講演

### ムリガンデ博士について

数学博士。教育（2009-2011 年）、内閣府（2008-2009 年）、外交・協力（2002-2008 年）、運輸・通信（1995-1997 年）など、多くの大臣職を歴任。2011 年 8 月から 2015 年 4 月までは、駐日ルワンダ大使も務めるなど、政治家として活躍。アカデミシャンとしては、1986 年、ナミュール大（ベルギー）で数学の博士号を取得した後、ブルンジ地理学研究所の科学顧問（1986 年～1988 年）、ハワード大学（ワシントン D.C.）の研究員（1989 年～1994 年）などを歴任され、また、ムリガンデ大使は、ルワンダ国立大学の学長／副学長（1997-1998 年）も務める。2020 年、ルワンダの教育セクターでの職を退職した。

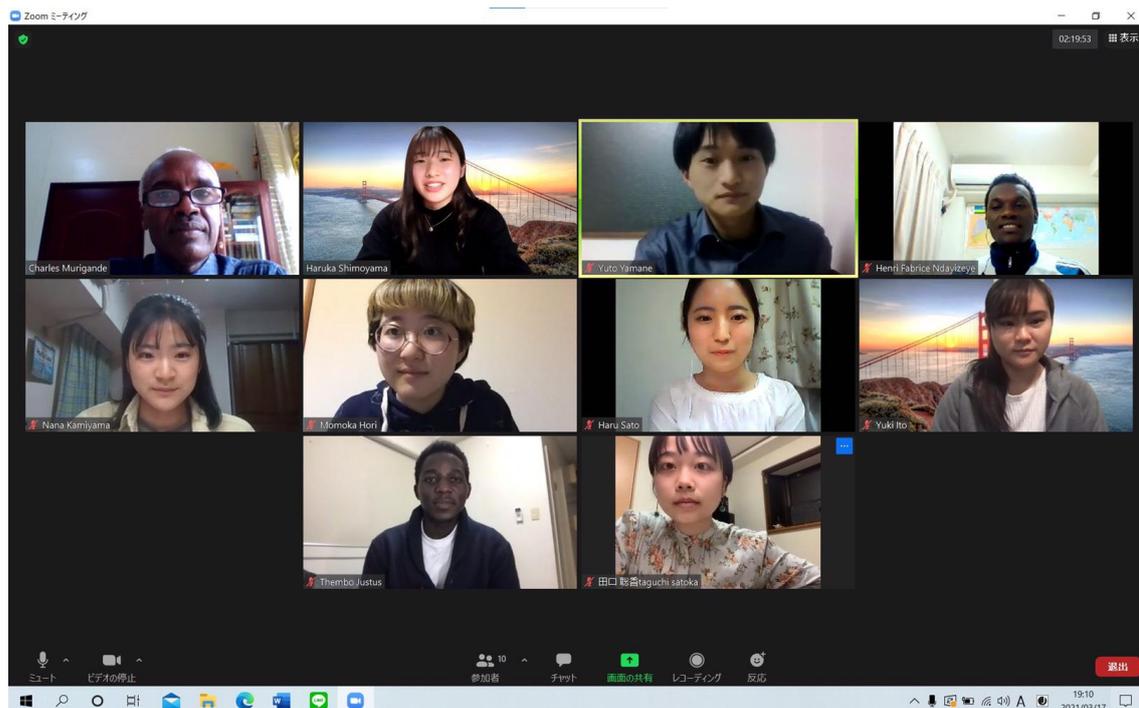
### ご講演の内容

博士には、特にルワンダの教育について、ルワンダの全般的な歴史も含めた、詳細なご講演をいただいた。お話しのお話は、ルワンダの教育制度が、どのように歴史的に変遷しており、それがいかにしてルワンダの歴史と関わってきたのか、ということだった。

植民地統治下では、学校の数がそもそも少なく、行政官の育成の為に、主にトウチの子弟に教育資源が割かれたようだ。独立後、ルワンダ大学ができるなど、教育の状況は改善したが、なお課題は多く残った。例えば、教育の各部門で卒業生の数は少なく、1994 年時点での高等教育卒業生は、3500 人程度だったという。ジェノサイドによって、教育制度は大きな打撃をこうむるが、復興の過程で、現在につながるような教育制度が構築された。現在では、ジェノサイド以前に比べ、初等・中等・高等教育の全てで、卒業生数が大きく伸びているという。例えば、2019 年時点で、高等教育の卒業生は 86000 人を超えるなど、20 倍を超える人数が卒業している。他方、現在のルワンダが抱える教育上の問題についても、具体的に教えていただいた。例えば、生徒のドロップ・アウトにどのように対処するか、その要因は何かなど、かなり細かい事情までお話しいただいた。他方で、質疑応答では、日本との共通の課題として、人文教育（Humanity）の振興が話題に挙がった。ICT 立国で際立った成果を上げているルワンダだが、人文教育はこれからの課題であるらしい。昨今の日本でも、人文教育がやや後景化しがちであり、両国の比較への視座を示唆するお話だった。

## 2020 年度オンライン・ルワンダ研修報告書

日本において、ルワンダの教育カリキュラムや教育制度について、体系的かつ最新の情報を得るのは難しいこともあり、非常に有難く、興味深いお話しだった。今回の個人研究のみならず、今後の研究・学習の指針になるような内容だった。今回のご講演を活かし、よりルワンダの現在に迫ることができるように努力していきたい。



ご講演の様子。右上がムリガンデ博士。

### 参考

<https://www.newtimes.co.rw/news/former-education-minister-charles-murigande-retires>

<https://en.ashinaga.org/kenjintatsujinmember/charles-murigande/>

(最終閲覧日 2021 年 5 月 16 日)

## One Love Project / ルダシングワ真美氏ご講演

### 訪問機関の概要

One Love Project は、ガテラ・ルダシングワ・エマニュエル氏、ルダシングワ（吉田）真美氏の夫妻によって設立された NGO 法人である。内戦直後から、足や腕を失ったの人々に義肢を提供し、ルワンダの歩みに寄与してきた。2007 年には、ルワンダ初のパラリンピック出場を主導するなど、際立った活動を展開している。近年の受賞歴は、2013 年の神奈川チャリティアクションキャンペーン、「共感発信プロジェクト」グランプリ受賞共感発信プロジェクト、シチズンオブザイヤー賞シチズンオブザイヤーなど多数。

### ご講演の内容

ルダシングワ真美氏に登壇いただき、ZOOM にて凡そ 2 時間のセッションを実施した。氏には、ご自身のライフ・ヒストリーから、One Love Project 設立の経緯や、現在の取り組みなどをお話ししていただいた。彼女は、日本で一般企業に勤めたのち、スワヒリ語を学ぶナイロビにわたり、パートナーのガテラ氏と出会う。その後、ルワンダ内戦にショックを受けて、義肢製作者になることを決意し、日本で修業を積んだのち、ガテラ氏と One Love Project を創設。その後、経済的なトラブルや政府の介入に遭いながらも、粘り強くご自身の活動を続けている。

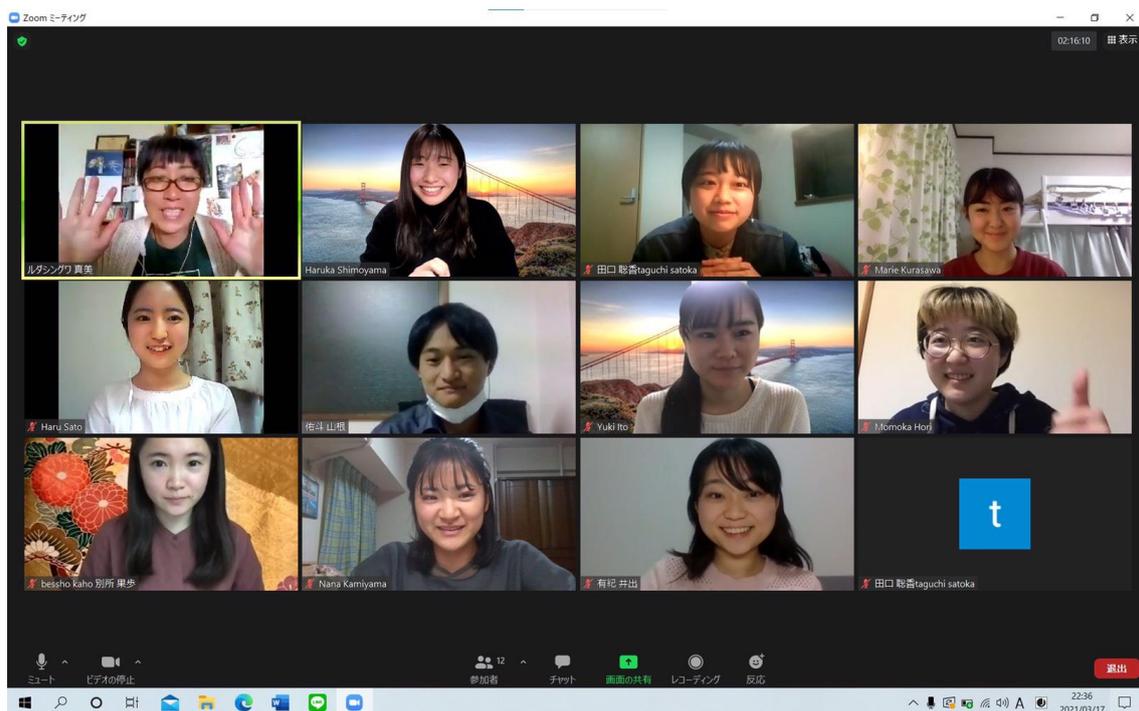
特に印象に残ったのが、彼女のお話が、単なる「キレイごと」ではなかったことだ。むしろ、彼女のお話には、ご自身の率直な感情が満ちていた。そこにあったのは、「国際協力」という語が連想させるようなサクセス・ストーリーではなかった。経済的な問題から、お金を渋ってしまう疾しさ、政府に暴力で介入されたときの喪失感や絶望など、現実に直面しながら One Love Project が奮闘してきた痕跡を、垣間見ることが出来た。そしてそのことで、ルワンダという他者に正面から向き合う手本を見せてもらえたと思う。

質疑応答では、今のルワンダのすがたに迫るようなお答えを頂くことが出来た。例えば、筆者の「ルワンダ人」という言葉の内実は、どうなっているのかという質問には、非常に示唆的な回答を頂くことが出来た。曰く、ジェノサイドの記憶が残るルワンダの人々は、互いに本音を言い合えない・言い合いづらいようになっているという。さらに、言論統制によって、率直にものを言えない状況になっているという。氏によれば、まだジェノサイドの傷、

## 2020 年度オンライン・ルワンダ研修報告書

そして「民族」というものは消えたわけではない。まだ和解に至るまでの時間はかかるし、その問題に入っていくこと自体が、困難であるという。

ルダシングワ真美さんが、一人の人間として、ルワンダに誠実に向き合い続けているからこそ、お聞きできたのお話だった。ルワンダのリアリティと、何よりルワンダへの向き合い方を示唆するような、重要なことを聞けたと思う。（山根）



ご講演の様子。右上がルダシングワ真美氏。

参考

<http://www.onelove-project.info/gateramami.html>

(最終閲覧日 2021年5月16日)

## キガリ高校 Lycée de Kigali (LDC)

### ①概要

キガリ高校は 1975 年にフランスによって設立された高校であり、1982 年からは政府の支配下にある。Government of Rwanda and Parents とパートナーシップを結んでいるため、国内各地からの生徒を受け入れており、優秀な成績を収めて大学に行く者も多い。理科系の科目に力を入れているため、物理、科学、生物の実験室などの施設も充実している。さらには、“Smart Classrooms”という ICT を積極的に利用した学びの場を作っている。今回は学長 Martin M. Masabo に連絡を取り、生徒と先生の交流する機会を作っていただいた。

### ②交流の様子

交流会では、キガリ高校から 5 名ほどの生徒、学長、そして ICT 関連を取り扱っている先生と MPJ の研修メンバーが参加した。講義ではなく、キガリ高校と MPJ メンバーの交流会という形で現地の高校の教育について理解を深めた。

まず、母語ではない教授言語である英語について伺うと、高校までになると言語に慣れるので、そこまでの苦労はないということであった。実際、キガリ高校の生徒は一般的な日本の高校生よりも流暢に英語で話していると感じた。また、ICT を積極的に利用しているということがわかった。この交流会もパソコン利用してやっていることからわかるように、学校にはパソコン室もあり、ブラックボードの代わりにプロジェクターの導入も進めている。今後世界に出て行くためには ICT の利用が必須であるという考えを語っていた。さらには、他学校とのサイエンスフェアやスポーツ大会など教室外での活動が充実していて、生徒にとっては重要な要素でもあるということをお話していた。

また、交流会では私たちの質問に答えていただくだけでなく、キガリ高校側からも多くの質問があった。例えば日本の教育ではどこに力を入れているかという質問があり、最近プログラミングの授業が必修化されたことや英語の教育についても説明した。さらには日本の塾文化なども紹介した。キガリ高校の生徒は、日本など外国での教育に対する関心がとても高いという印象であった。その他にも日本に留学するためには何が必要か、日本の大学でルワンダに支部をおいている大学はあるか、などという質問があり、将来外国の大学で学ぶことを視野に入れている生徒もいることもわかった。

### ③交流を通して

まず、一般の高校であるということで、そもそもアポイントメントを取ることができるか不安であったが、電話をしたら直接学長に繋がり、とても丁寧に対応して下さったのが嬉しかった。そして、交流会ではキガリ高校の生徒も積極的に質問をしていて、日本での教育に対する関心もあることが伝わってきた。なかなか話すことのないルワンダの高校生と日本の大学生の交流は、お互いにとって貴重な経験になったと思う。（倉沢）

ホームページ：<http://lycedekigali.ac.rw/>（最終閲覧 5 月 17 日）

### 3. その他の活動報告

#### ルワンダ研修東京観光

##### ①活動内容

日本とルワンダの文化交流という目的のもと、私達 MPJYouth のメンバーが、東京外国語大学に留学している PIASS (プロテスタント人文社会科大学) の学生に東京を案内した。PIASS からの学生は 3 人が参加してくれたため、3 班に分かれ 1 班 4 人程度で東京を観光し、交流を図った。

行き先は班によって異なり、浅草・東京スカイツリーや井の頭公園といった観光地から、ROUND1 のようなアミューズメントパークまで、様々であるが、どの班も留学生の興味や、行ってみたい場所を聞き、班員で話し合っただけで決定した。観光地の説明や、移動中には雑談といったコミュニケーションは、基本的に英語で行った。

##### ②東京観光を終えて

私の班は、1 日目に浅草と東京スカイツリーへ行っただ。私は人前で英語を話すことに非常に苦手意識を持っており、留学生との東京観光が不安で仕方なかった。しかし、留学生と 2 人きりになるタイミングがあり、どうしても私が会話せざるを得なくなった場面で、勇気を出して話しかけてみると、思っていたよりもしっかりと会話できた。たどたどしい英語でも、知っている単語やジェスチャー、表情をフル活用すれば、意外と伝わるということがわかり、今後は自分で勝手に壁を作って語学力を伸ばすチャンスを無駄にすることはやめようと背中を押された思いになった。

浅草とスカイツリーは東京でも最も有名といえるほどの観光地であり、海外に向けた案内の充実さが印象に残っている。どのお店にも英語・中国語・韓国語のメニューがあり、店員さんも留学生に積極的に声をかけていた。中には英語で話す人もいて、元々英語が得意で働いた場合もあると思うが、商売のために覚えたという人も多いはずで、身を置く場所は自分の能力に大きな影響を与えるということを感じた。

2 日目は ROUND1 でボーリングや卓球、ビリヤードを楽しんだ。なんと留学生はどれも初挑戦で、卓球のラケットやビリヤードのキューにとっても興味を持っていた。体験型の観光という、和菓子を作るとか、和服を着るといった私達日本人でも日常的にはやらないような、いわゆる「日本文化」に触れることが多いと思う。しかし、今回の ROUND1 のように、私達が普段当たり前に行っているもっとポジティブな意味で「普通の」文化に触れることも、異文化交流において有意義なのかもしれないと考えた。

オンラインの活動が多い中、直接交流できたことは、1 つの良い思い出になったと同時に学びの面でも実りがたくさんあった。留学生の 3 人に感謝を伝えたい。



東京スカイツリーにて、留学生のテンボと。

## 学生会議

### 概要

ルワンダ第二の都市フイエ（ブタレ）に位置する、PIASS（Protestant Institute of Arts and Social Science：プロテスタント人文社会科学大学）の学生たちと、学生会議を行った。会議は ZOOM を利用して実施した。ブレイク・アウト・セッションの機能を用いて、3-5 人の小グループに分かれたのち、日本人学生が自らの関心に基づいて提題し、ディスカッションを実施した。提題されたトピックとしては、「自分の国の好きなのところはどこか?」「言語使用と教育の関係」「ICT と農業」など、個々の関心によって、多岐にわたった。

なお、この会議は、PIASS 教員の佐々木和之氏、ならびに本研修メンバーの飯野真子（東京外国語大学 4 年：当時）の助力によって実現した。両名に、深く感謝申し上げる。

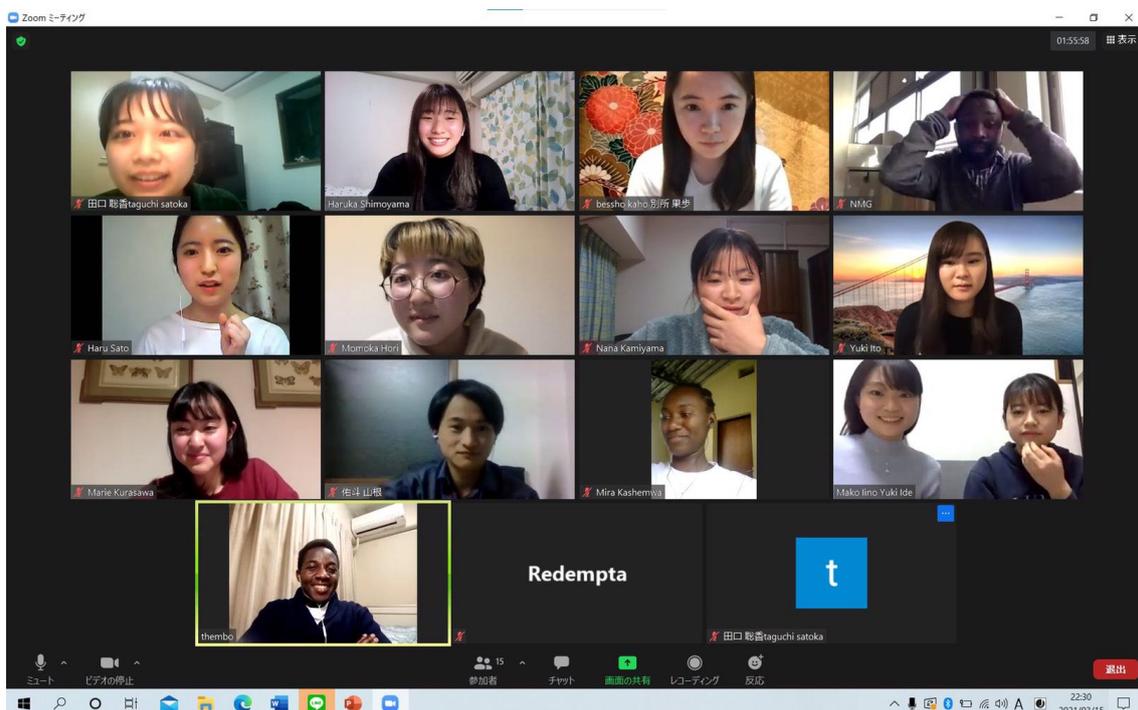
### 内容

ズームでの、大人数での実施だったため、電波などのトラブルもあったが、しっかりコミュニケーションをとることが出来た。本研修では、なかなかルワンダに住む人々の話を聞く機会を設けられなかったので、学生会議は聞き取り調査の場としても、非常に重要な機会となった。私たち自身の興味関心を深めるとともに、実際にルワンダに生きている、同世代の学生の意見に触れることができた。

私個人は、「自分の国のどこが好きか」というトピックを提題した。印象的だったのは、PIASS の学生が、自分の国のことを愛していることだった。実際に交流した PIASS の学生の国籍は、ルワンダだけではなく、隣のコンゴ民主共和国など、多彩だった。しかし、皆自分の国のことを、まず率直に「好きだ」と言っていた。日本という国では、極端に愛国主義的な言説や歴史修正主義が問題化する反面、伝統文化の後継者不足や移民問題など、従来の「日本」という枠組みがゆらぐという、両義的な経験をしていると思う。私自身、日本という国に対しては、正直アンビバレントな感情を抱いている。PIASS の学生たちが、素直に「母国が好きだ」と発言したことからは、自分の国との関わり方を考えるヒントをもらえそうな気がした。

## 2020 年度オンライン・ルワンダ研修報告書

会議では、私たちが提題したテーマだけに限らず、好きな音楽や故郷のことなど、様々な話をする事ができた。現地での聞き取りが必要なテーマを研究しているメンバーも多いため、皆思い思いにこの機会を活用していた。PIASS が、周辺のアフリカ各国から留学生を多く集めていることも手伝って、日本-ルワンダという枠に収まらない、非常に国際的な交流をする事ができた。言語の壁はあったものの、互いに歩み寄り、有意義な時間になったと思う。(山根)



学生会議の様子。

#### 4. メンバー紹介

井出 有紀 (東京外国語大学国際社会学部 4 年、研修代表：当時)

飯野 真子 (東京外国語大学国際社会学部 4 年：当時)

佐藤 晴 (東京女子大学現代教養学部 4 年)

山根 佑斗 (東京外国語大学国際社会学部 4 年、研修副代表)

田口 聡香 (東京外国語大学国際社会学部 3 年)

別所 果歩 (東京外国語大学国際社会学部 3 年)

堀 桃花 (東京大学農学部 3 年)

伊藤 有紀 (東京大学教養学部 2 年)

神山 奈々 (東京外国語大学国際社会学部 2 年)

菊池 宙 (東京大学教養学部 2 年)

倉沢 麻里江 (東京外国語大学国際社会学部 2 年)

下山 知花 (東京外国語大学国際社会学部 2 年)

## 7. 終わりに

この研修を通して、じゅうぶんルワンダを知ることができるのか、ということに、少なくとも私は、自信が持てませんでした。ルワンダに直接行くこともできず、オンラインでの交流と、日本での文献調査・講演などによって、果たしてどこまでできるのだろうか、と不安に思いながら活動してきました。それはおそらく、どのメンバーも同じだっただろうと思います。

たぶん私たちは、十全にルワンダのことを知った、とは言えないと思います。何しろ渡航することさえできなかつたのですから。その意味では、皆歯がゆく悔しい想いを抱いているかもしれません。それでも、できる限りで、ルワンダを知るための努力をしたことは、疑いありません。各々が日々の合間を縫って文献を読み、またルワンダの人々のお話を伺い、少しでもルワンダに近づこうと努力してきました。この報告書は、このような私たちの身振り、ルワンダへ向けた歩みの、一つの成果です。コロナ禍によって、異例づくしだったこの研修の成果を、最終的に一つの形にできたことを、心から嬉しく思っております。

こうして一つの成果を形に残せたことは、多くの皆さまからのご支援・ご指導のおかげです。助成して下さった公益財団法人 双日国際交流財団様、公益財団法人 三菱 UFJ 国際財団さま講演して下さった皆様、交流の企画に協力して下さったルワンダの皆さまや留学生の三人、温かく支援して下さった SPJ の皆様に、改めて深く感謝申し上げます。また、私たちが活動する場をしっかりと確保し、支援してくれた MPJ Youth にも、感謝いたします。そして最後に、ここまで努力してくれた研修メンバーに、心から敬意を表します。

研修副代表 東京外国語大学 4 年 山根佑斗